

◆名作文学を

忍殺語で翻訳してみた◆

(スゴイ・簡易版)

ユキグニ

作・川端康成〓サン 翻訳 アワ・マサヒロ〓サン

クニザカイの長いトンネルを抜けるとユキグニであった。夜の底が白くなつた。信号ポジヨンにキシヤが止まつた。

ムコウサイドの座席から娘が立つて来て、島村の前のガラス・ウインドウを落した。雪のヒエヒエ・アトモスフィアが流れこんだ。娘はウインドウいっぱいに乗り出して、ムコーへ叫ぶように、

「エキチヨー〓サン、エキチヨー〓サン」

ボンボリをさげてゆつくり雪を踏んで来た男は、エリマキで鼻の上までパツク、耳に帽子のヘアー・スキンを垂れていた。

もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、サツキョー・ライン鉄道の官舎らしいバラックがマウンテン・スソに寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうちにノマレル・イン・ザ・ダーク。

「ドーモ、エキチヨー〓サン。ワタシデス。ゴキゲンヨロシユー!？」

「ドーモ、ヨーコ〓サン。エキチヨーデス。オカエリー! またサムくなつたね」

なんとなく好きで、その時は好きだとも言わなかつた人のほうが、いつまでもなつかしいのね。忘れられないのね。別れたあとってそうらしいわ。

なんとなく好きで、アットザットタイム好きだとも言わなかった人のホーが、いつまでもナツカシサなのね。アンフォーゲッタブルなのね。サヨナラ！ したあとつてそうらしいわ。

水を浴びて黒いモエルゴミが落ち散らばった中に、駒子はゲイシャの長い裾を曳いてよろけた。葉子を胸に抱えて戻ろうとした。その必死に踏ん張った顔の下に、葉子のテンノボリしうにうつろな顔が垂れていた。駒子が抱くは犠牲か刑罰か？

人垣が口々に声を上げて崩れだし、どつと二人を取り囲んだ。

「アイエエエ！」「アイエエエ！」「アイエエエ！」

「どいて。どいてちようだい！」

駒子の叫びが島村に聞こえた。

「ドーモ、シマムラサン。コマコデス」

「ドーモ、コマコサン。シマムラデス」

「この子、気がちがうわ。気がちがうわ」

そういう声が物狂わしい駒子に島村は近づこうとして、「Wasshoi」葉子を駒子から抱き取るうとする男達に押されてよろめいた。「グワーツ！」踏みこたえて目を上げたたん、「サアー！ サアー！」と音を立ててアマノ・ガワが島村の中へ流れ落ちるようであった。

走れメロス／走れフジキド

作・太宰治Ⅱサン　スズリン・スズリⅡサン

フジキドは激怒した。必ず、かの邪智暴虐めいたニンジャ・ラオモトⅡカンを除かなければならぬと決意した。フジキドには政治がわからぬ。フジキドは、村のサラリマンである。シャクハチを吹き、バイオシップと遊んで暮して来た。けれどもニンジャに対しては、人一倍に敏感であった。

「ニンジャは、人を殺します」

「なぜ殺すのだ」

「悪心を抱いている、というのですが、誰もそんな、悪心を持つては居りませぬ」

「たくさんの人を殺したのか」

「はい、はじめはニンジャの妹婿さまを。それから、御自身のお世嗣を。それから、妹さまを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、賢臣のアレクスⅡサンを」

「アイエエエ！　サツバツ！　ラオモトは乱心か」

「いいえ、乱心ではございませぬ。人を、信ずる事が出来ぬ、というのです。このごろは、臣下の心をも、お疑いになり、少しく派手な暮しをしている者には、人質ひとりずつ差し出すことを命じて居ります。御命令を拒めば十字架にかけられて、ハリツケ！　きょうは、六人殺されました。ナムアマダブツ……」　聞いて、フジキドは激怒した。「スゴイ・シツレイなニンジ

ヤだ。ラオモト殺すべし」

フジキドは、単純な男であつた。買ひ物を、背負つたままで、のそのそウカイヤにはいつて行つた。たちまち彼は、巡邏のクローンヤクザに捕縛された。調べられて、フジキドの懐中からはスリケンが出て来たので、騒ぎが大きくなつてしまつた。フジキドは、ニンジャの前に引き出された。

「ムツハハハハハハ！ このスリケンで何をするつもりであつたか。言え！」

暴君ラオモトⅡカンは静かに、けれども威厳を以て問いつめた。そのニンジャの顔は蒼白で、眉間の皺は、マウント箱根の険峻な山々めいて深かつた。

「ネオサイタマを暴君の手から救うのだ」とフジキドは悪びれずに答えた。

「ドーモ、ラオモトⅡサン。フジキドです。その人を殺してはならぬ」

と大声で刑場の群衆にむかつて叫んだつもりであつたが、喉がつぶれて噎れた声が幽かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。すでに磔の柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンテイウスⅡサンは、徐々に釣り上げられてゆく。フジキドはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように群衆を掻きわけ、掻きわけ、

「私だ、マッポ！ 殺されるのは、私だ。フジキドだ。彼を人質にした私は、ここにいる！」と、かすれた声で精一ぱいに叫びながら、ついに磔台に昇り、釣り上げられてゆく友の両足に、齧りついた。群衆は、どよめいた。あつぱれ。ゆるせ、と口々にわめいた。セリヌンテイウス

Ⅱサンの縄は、ほどかれたのである。

「セリヌンティウスⅡサン」フジキドは眼に涙を浮べて言った。

「私を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若し私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえ無いのだ。殴れ」

セリヌンティウスは、すべてを察した様子で首肯き、

「イヤーツ！」「グワーツ！」

刑場一ぱいに鳴り響くほど音高くフジキドの右頬を殴った。殴ってから優しく微笑み、

「フジキドⅡサン、私を殴れ。同じくらい音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。生れて、はじめて君を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱擁できない」

「イヤーツ！」「グワーツ！」

フジキドは腕に唸りをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。

「ありがとう、友よ」二人同時に言い、ひしと抱き合い、それから嬉し泣きにおいおい声を放って泣いた。

なんと感動めいた光景か！ 群衆の中からも、歎歎の音が聞こえるではないか！ 暴君ラオモトは、群衆の背後から二人の様を、まじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔をあからめて、こう言った。

「アイエエエ……おまえらの望みは叶ったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、

決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい」

どっと群衆の間に、歓声が起こった。

ひとりの少女が、マグロめいた色のメンポをフジキドに捧げた。フジキドは、まごついた。佳き友は、気をきかせて教えてやった。

「フジキド、君は、マツパじゃないか。早くそのメンポを付けるがいい。この可愛い娘さんは、フジキドのカタナを、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ」

しかしなんとマツポーめいた光景か！メンポを付けるだけではマツパは隠せなかった！ヘッド隠してシリ隠さず！フジキドは恥ずかしすぎて爆発四散！

◆心温まる◆ドーモ、ニンジャヘッズの皆さん。スズリンです。この冊子は「著作権の切れた名作文学を忍殺語に翻訳しよう」というコンセプトのもと、ニュービーが制作したものである。あまりにも稚拙な翻訳によるケジメはついていません。ごあんしんください。次回こそはもっとステキなファンジンをお送りします。

公式アカウントの翻訳チームの皆さん。スゴイ・ステキな作品をありがとうございます。ではニンジャヘッズの皆さん、サヨナラ！◆ファンジン◆

◆名作文学を忍殺語で翻訳してみた◆

収録作品

- ・ユキグニ アワ・マサヒロ＝サン
- ・走れフジキド スズリン・スズリ＝サン

制作サークル

- ・流星ハートビート

<http://novel-heartbeat.com/>

原作出典

- ・ニンジャスレイヤー
Twitter 公式アカウント @NJSLYR
- ・ネオサイタマ電脳 IRC 空間
<http://d.hatena.ne.jp/NinjaHeads/>
- ・書籍版公式サイト
<http://ninjaslayer.jp/>